

### 第三章 軟式から硬式へ

大正九年秋、日本の庭球界は大きく変化した。高師、高商、早稲田その他の専門学校はいっせいに、それまで長い間続いた軟球に代って硬球を採用したのである。ただ、慶応だけは、大正二年から硬球になっていた。この年の五月、高商と早大の試合において高商は八年振りに勝ったがこの時の早大の敗北が硬球化の導火線になったとも言える。

硬球採用については、これより先にも早稲田出身の三神八四郎氏は強く主張している。(大正元年「武狭世界」誌「庭球百年」から転載)

「外国の運動を輸入しながら、外国と試合の出来ぬのは、テニスばかりである。すべての運動は世界的に発達してきたので、日本のみ軟球を使用することは、世界と技を戦わずには役に立たない。ゴム球(軟球の意)を使用し

ているのは、恐らく日本位のものであろう。外国では一度ゴム球を使った後、今のようなボール(硬球)を使うようになったことを知れば、ゴム球を使う日本が、それを習うことは当然と思う。硬球は高価だから、ゴム球を代用したので、別にゴム球に興味があるとか、他に理由があるのではない。

いずれにしても、我国庭球の過去、現在を顧み、併せて海外の庭球進歩の跡を探り、世界の大勢の向かうところに従えば、近き将来において、我国が一般的に硬球を使用するようになることは明白である」と識見の高さを示している。しかし、この頃は未だ時勢に先んじていたので、世の中は未だ耳を傾けず、実行に移すに至らなかった。この一文は、硬球採用に関する最初のものと思われる。

大正十年、デビスカップ試合に初めて参加した熊谷、

清水両選手は驚異的な戦績を残し、チャレンジ・ラウンドまで進出し、ゲートマネー（入場料）約四万円を持って帰朝した。これを基金として、翌十一年三月に日本庭球協会が成立するに至った。

この年、新興の気運にも恵まれ、第一回関東学生リーグ試合が行われ、法大、帝大、早大、高師、明大、商大、高工、慶大が参加し、単複とも慶大が優勝した。

軟球時代には「帝都に農大あり」と言われたわが部は、対戦相手をなくし、他校より一年遅れて硬球の仲間入りをした。

この硬球採用に踏み切った当時は、かなり勇気が必要だったであろうし、その後は大変な苦労があったようである。

その頃の様子を次の手紙が物語っている。

Y兄

農友四十九号(大正十一年三月)  
から転載

ぼかくと暖かい日が続く様になりました。プレスにしめつけられたラケットの糸がピン／＼と春らしい音を立て始めました。早いものですね。兄をお送りしてからもう一年経つたのですもの。ほんとに考へますと涙ぐましい氣がいたします。毎日々々手を取る様に何から何までお世話して下すつて教え導びいて戴きやつと一人立ちでラケットが振れる様になり面白い試合も出来る様になると直ぐに兄は御卒業でした。そしてこの時から新しく硬球を採用しやうと言ふのでした。お喜びとお別れとを兼ねてさよならを申し上げましたらさうですあの時兄は私の肩をたゞいて『これからだよ君しつかり頼むよ。硬球になつて苦しいだらうけど』とやさしくおつしやいましたね。あの時はほんとに親鳥を離れた巣立ち子になつた様な氣がいたしました。やれるだらうか？ こんなに期待されて居て——いややらねばならぬのだ。やるぞ。この光輝ある吾農大の庭球史に新しい硬球の一頁を加へ様として居るのだもの。微力乍ら全力を注がねばなら

ぬ。どうしたつてやる——と心に誓つたのでした。あれからも一年経つたのです。あの時はもう遅い紅梅も散りかかつて居ましたね。

Y兄

それからの一年間。ほんとに何とお詫び申上げていゝやら。私が不甲斐なかつたのです。意氣地なかつたのです。努力しました。併し駄目でした。新らしきシーズンを迎える前に去年の状態を追懐するのも無駄ではありますまい。否兄の前に訴へたいのです。どうかしばらく聞いて下さい。直截に申し上げます。私共は事實硬球と云ふものに初めどうしてもなじめなかつたのです、理解し得なかつたのです。軟球ならば少なくとも自由に思ふまゝに面白く微妙に渡つて全能力を球の上に表はすことが出来ました。そしてその靈妙な味に愛着を感じ離れともない氣がいたして居りました。それが急に一面識もないしレギュレーションになりました。ラケットは重し球はずみがよくて全く感じがちがふ、いやはや豫想以上の難物であることに先づ驚ろかされました。そこに早くも不安と焦慮とを萌したのです。

Y兄

私共の練習振りかなしい哉校友諸氏の嘲笑の的となりました。同情して戴く餘地のない程な不味さ加減だつたのです。愉快な談笑室であつた庭球小室は私には人にかかれて涙拭く場所になりました。研究するにもお手本はありません……校友諸氏もこの憾は御同様のやうでした……全く闇夜を手さぐりで物さがしをする様な何とも言ひ様のない不安な悲しみが湧いて來るのです。それでもラケットと言ふものを初めて持つた人の氣になつて冷評を外に一心練習を續けました。この間の苦衷お察し下さい。それだのに悪い時には悪いことのできるもので長い長い近年稀な雨に逢い杖とも柱ともコートは土を洗ひ流され、風で金網は倒されほんとに淋しい淋しい見すばらしいコートになつてしまひました。誠に私共の未熟の辯解になりますけど愚痴だと思つても少し聞いて下さい。

このコート修復に吾部の多くもない豫算の全額は使ひ盡されたのです。こゝに早くも吾々に經濟的壓迫が來ました。それから先輩諸氏に御援助をあほぎやつと露の命

をつなぎました。修繕したとは申せコートは底地にあるものですからどうしても何時もじめくして足はすべる硬球の眞白な美しいラシヤは直ぐ眞黒になりパウンドは極めて不正確、球の溫氣に依つてラケットのガツトはすぐに切れて用をなさなくなるのです。Y兄よ吾々は有り餘る金で勉強して居る者でもありません。ガツトは三日と耐えません。その都度三圓也を運動具店にしぼられるのです。かくて各選手個人の負擔は重むし面白味の湧くのは遅い。各選手も段々愉快な他の方面に走り初めました。これも亦止むを得ぬ次第です。

Y兄よ。かなしいことにはかゝる不備と不快とから練習は日毎にさびれて行きました。そしてコートは時には近傍の無邪氣な子供達のボールのグラウンドになるのでした。私は子供達を叱り乍らもさびれはてた吾がコートも眺めて悲憤の涙は止め度もなく流れたのでした。なさけなかつたのです。

Y兄　こゝまでの事實ではほんとに貴兄を悲觀させてしまつたことゝ存じます。併し以上は昨年の特ニスシーズンの前半期の状態だつたのです。泣いてばかり居る意

氣地なしでもなかつたのです。溺れたるものは藁屑でもつかむと申します。私共は活路を見出す可くもがきました。もがいた結果私共主な選手は面白く遊ぶ可き休暇を利用して各自國々に分れ散つて硬球を採用して居る諸校の選手に面會して熱心にコーチを受けたのです。これからののです、吾々が硬球に親しみを持つ様になり、その細かなモーションとかネットプレーの妙味を解する様になりましたのは。その後は不味い乍らも着々進歩が見えて來ました。皆は喜びに酔つて居ます。その時丁度名選手清水氏が歸朝になりました。私共は喜びました。試合のある毎に見せて戴きました。關西までも追つ掛けて見ました。氏の御講演を拜聴しその御練習振りや試合を實地に見てから私共の硬球に對する觀念は一新紀元を劃したと云つてよろしいのです。迷夢はれて一點きらめく明星を見出した心地です。氏の愉快さうな球のコナシ、あの美しいモーションを見物して居た吾々は黙々の中に互に堅く堅く手を握り合つて吾々の今後の行く手になげ能へられた光明を祝福して嬉し涙にくれたのでした、闇夜に燈臺の光をやうやく見出した船人の心で——それはほ

んとにうれいものでしたのです。どうか今後の吾々の行動を見て居て下さい。

春景色もやゝ調ふ頃になりました。私共の時に近よつたのです。萬都の人士は花にも酔へ酒にも狂へ。吾等はコートに、昨年の情性を一掃する時機が來たのです。

Y兄、杉様のお座敷からハラリくと櫻の花びらが飛んで吾がコートに散り敷く頃には是非一度來て下さい。そして樂しき頃の話しをいたさうではありませんか。皆お待ちして居ります。現選手には兄の指導を受けた舊選手、原田君、藤木君、荒木君、山田君、石倉君、芝君の外に今度高一から竹中君と河村君と高二から太田君とが加はりました。私共同様御指導下さる様私よりお願いいたします。長々とくだらぬ事のみ書き立てまして相済みません、どうか御身體を御大切に遊ばされんことのみ祈り居ります。勿々頓首（御持病御見舞）先は御大事餘寒烈しく候へば。

Y 兄 足 下

S よ り

このような汗と涙の結晶によって硬球が次第に自分達のものになつていった。

この頃の関連記事を次にあげる。

#### 會員諸兄よ

農友五十号（大正十二年三月）  
から転載

其の昔庭球界の權威者として動いて居た我が部も文明の庭球に移りしより日尙ほ淺くして漸時其の鳴を沈めなければならぬ時その時は今即ち現在である。

吾等が今迄得た軟球の知識と地位とを捨て、一面識もないレグレーションは其の練習に於て仲々の苦心を續けて居る。技術と練習の不足は明らかに本年度に於ける成績に表はれ來た、そして吾々が死力を盡した事も水泡に期して失つた、そして會員諸兄の期待を破りし事は吾部の遺憾に堪えない次第である、諸兄等の熱と血ある應援は今にきつと捲土重來の強者として立つ事が出来る春が來るだらう否是非やつて來る事と信じて止まない。

荒木選手を送るの記

短かい三ヶ年後悲しみそして嘉悦の中に吾々は荒木選手を送つて失つた。

荒木選手送別の辭

慨 略

(原田太郎君)

今私共は兄を送らんとして居ます、氏は私共の非常の悲しみの一つでありますが一方大いに貴兄の前途ある社會への一步を御祝し申し上げます、過去三ヶ年兄は私共の父となり母となりよく拙い私共を御指導下さいまして今御卒業なさるので、思へば夢とより外ありません。

私共は此の後親を失つた子鳥の様に毎日く／＼兄を思ふ事です、それ以上子を失つた親鳥の悲しみは何でせう……略。

最後に私共は榮ある貴兄の御卒業を御祝申しますと同時に去り行かれた後も吾部の爲に大いに御教訓を垂れ給はん事を部員を代表致しまして此處に送別の辭に代へます。

N 生 投

大正十一年六月十日に対高等工業と試合を行った。当日は曇勝の天候なりしも吾が部の勇士早朝より倉前に集合し戦は結局左の如き九対零の大スコアにて我校の大勝に歸した。

農大 高工

ダブルス

No. 1 ○荒木・原田 (4-6 6-2 6-1) 石井・高松

No. 2 ○芝 山田 (4-6 6-3 6-4) 鶴見 渡邊

No. 3 ○河村・竹中 (6-4 6-4) 加藤・三島

シングル

No. 1 ○荒木 (4-6 6-4 6-4) 石井

No. 2 ○芝 (6-2 6-2) 高松

No. 3 ○原田 (4-6 6-1 6-2) 鶴見

No. 4 ○山田 (6-1 6-3) 渡邊

No. 5 ○河村 (6-3 6-4) 加藤

No. 6 ○竹中 (2-6 6-1 6-4) 三島

九月二十一日からカレッジ・オープン・トーナメントが早高、師、立、慶大のコートに於いて開かれた。

第三回戦

(農大) 原田 (0-3) 川津 (商大) ○  
 大正十二年四月二十一日から、都下専門学校リーグ戦  
 が始まった。  
 結果は次の通り

第二回戦 対帝大 (於早大コート)

農大 帝大

No. 1	山田	(1-6)	0-6	0-6	木島
	竹中				住田
No. 2	原田	(1-6)	5-6	1-6	大井
	河村				深谷
No. 3	中川	(1-6)	2-6	0-6	二木
	芝				神戸
No. 1	竹中	(1-6)	1-6	1-6	青沼
No. 2	中川	(7-0)	1-6	1-6	深谷
		5-6			○
No. 3	原田	(0-6)	1-6	0-6	神戸
No. 4	河村	(1-6)	1-6	2-6	大井
No. 5	芝	(7-6)	4-6	4-6	二木
		5-1			○
No. 6	山田	(1-6)	0-6	2-6	木島
					○

八月三十一日、グラウンド・テニス・トーナメントは鶴  
 見花月園コートに於いて挙行された。本学よりは中川一  
 人出場す。

第一回戦

(本学) 中川 (9-7 6-1) 増田 (モーニング)

第二回戦

中川 (0-6 2-6) 原田 (慶大)

第二回戦は火災のため十月三十一日に行われた。

十一月六日から第三回カレッジ・オープン・トーナメ  
 ントが挙行され、本学からも原田・中川組、竹中・山田  
 組が出場したが残念乍ら一回戦で敗退した。

農友五十号には次のような記事もある。

庭球部の慶と将来

今や東都にありて其の技量を認められつゝある今日原  
 田、芝、河村、竹中四氏を來るべき三月には望みある社  
 會へ送り出さんとす氏等が吾部にありて、その活躍や眞  
 に目覺しきものあり、氏等の吾部を退くに當たり、茲に

氏等が經歷の少しを掲げて吾部に盡せし甚大なるもの感謝の幾分をも捧ぐ。

原田君は九州島原中學出身本學庭球部に入部してより過去五ヶ年精勵一日の如く吾部の花形である、芝君四國松山中學出身原田氏と共に我が部の一大研究者にして、軟球より今日のレギレーションに改良されたる後氏の親切と技術の研究は吾々部員の深く感謝し手本とする所である、竹中氏は富山縣魚津中學出身、氏の運動は庭球のみならず柔道に於ても彼の巨軀を動かして居る事をも見る元氣に於て正に吾が部の一人者である、河村君京都立命館中學出身氏は其のテニスに於て技術に於て進歩の早きに驚かされるその天才は吾が國一流選手をもあつと言はせる位である。

共に來るべき三月には榮ある卒業式に臨れるのである、茲に四氏の多年の勞を謝し將來に幸多かれと祈つて止まぬ。

高二 庭球部委員 中川 生

新入生歡迎庭球大會記

五月五日土曜日、本學コートに於て舉行

集る紐約二十組にして、米滿、伊吾優勝す  
氏の大會に於て部員一同集合協議の末技量優等者六人を撰抜して部員に新たに加ふ

青木、清水、菊地、伊、高橋、米滿君